まちづくりひろしま

被爆１００年(西暦2045年)の姿をめざして

第１３号(平成２６年９月１５日)

読者数：４８５名（募集中）

ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ：hirosima.idea.c@urban.jp
〒733-0002　広島市西区楠木町 1-9-7
発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二
配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

このたびの広島における大規模土砂災害でお亡くなりになられた方々のご冥福を深くお祈りいたします。また被災された方々に衷心よりお見舞い申し上げます。

様々な形でまちづくりに関わってきている私たちにとって、今回の災害は痛恨の極みであり、今後少しでも必要な政策提言や対策の支援に関わっていくつもりです。皆様とともに、被爆、土砂災害を乗り越えた新たな広島を作り上げていきましょう。今後ともよろしくお願いいたします。

編集委員一同

□巻頭言

これでいいのか！まちづくり手法

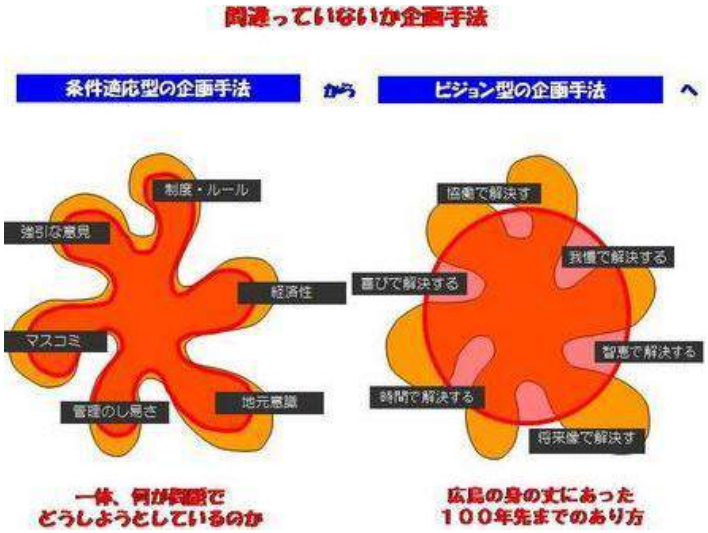
中国セントラルコンサルタント代表
編集委員
前岡智之

家族が寝しずまったある夜中のこと。私は、かすかな地響きに目を覚ましました。揺れは激しくなり、ゴォーッと地鳴りがしてきます。急いで家族を起こし外に出ました。向うから、とてつもなく大きな物体が迫ってきます。「危ない、やられる！！！」身体をすぼめます。――――運が良かったのか、間一髪のところを通り過ぎていきました。翌朝、家の前には、立派な道路が出来ていました。と――――まちづくりが私達の知らないところで進んでいくことをお話しする時に引用する話しです。

多くの人々が集まり暮すまちのあるべき姿を目指して、計画的に効率的にそして実感を持ちながら実現していくことが[まちづくり]とすれば、今までの進め方は、あまりにも不十分であったようです。ここで、何故[まちづくり]がこうなってしまっているのか、そしてどうしていったらいいのかを考えてみました。

図のような条件適応型のまちづくり手法では素敵な明日が見えてきません。効率性、経済性、管理のしやすさ、マスコミ受け、地元の了解、ときには強引な意見などまちづくりを制限している要素は数限りなくあります。これまでの計画の多くを振り返ってみると、これらの条件にいかにうまく適応するかが課題とされてきたように思われます。お役所は、これらの点を解くのが大得意です。その結果が評価されるのです。しかし 50 年・100 年先のまちのあり方を考えた場合、

これらの条件をクリアーしただけの提案では、不十分です。むしろ苦しくとも有り得るべき姿を先に発想して、これを実現する上で出てくる課題を解決していく、いわゆる**ビジョン型のまちづくり手法**が重要となります。今の条件に合わないところは、みんなの我慢で解決していきましょう、時間で解決していきましょう、それぞれの知恵で解決していきましょう、協働で解決していきましょう、そして将来像を見据えた喜びで解決していきましょう。



この手法はお役所にはできません。私たちが率先して[まちづくり]のビジョンを描き、むしろお役所はそれを支援するほうが望ましいのではありませんか。

広島は、被爆後 70 年を迎えます。私たちの身の丈にあった 100 年を市民が実感を持てる方法で考えていきたいものです。折しもお役所は、数々の被爆 70 周年記念事業を用意しているようです。それはそれでよいとして、もっとも大切なのは、私たち一人一人の被爆 70 周年記念事業ですね！

ひろしまのまちづくりの動き

○広島土砂災害発生！

８月２０日未明に安佐南区と安佐北区の山裾の団地に甚大な土砂災害が発生。災害の要因として局地的な豪雨、山裾や谷あいの造成地、水を含むと崩れやすい真砂土地盤、避難勧告の遅れ等が重なった。

高度経済成長期に入った１９６０年代から全国各地で郊外にベッドタウンがミニ開発された。乱開発を防ぐため１９６９年に現行の都市計画法が施行され、大規模な開発行為は県知事等の許可が必要となる。

読売新聞（8/２６付）より

平地の少ない広島はどんどん郊外へ、しかも山裾から中腹にかけてスプロール化が進み、今回被害を受けたエリアも１９６９年以前に造成着手された団地が多く含まれる。

今回の土砂災害は自然の猛威による天災と同時に災害が予測しうる人災でもあった。この際、全国で山裾の造成団地の総点検を行い、危険な個所は移転勧告を出すべきである。勧告に従うか否か、住民の判断に委ねられるが、住み続ける場合は相当の覚悟が求められる。高齢化と人口減少の進行により、郊外から都心回帰の傾向が助長されることになりそうだ。

（編集委員　瀧口信二）

○白島新駅、来春開業予定！

白島新駅は２０１０年の公募型プロポーザルにより設計者を選定。設計の過程で予算オーバーのためコスト縮減の見直しを行い、２０１３年１月に工事着手。来年春の開業を目指して、現在新駅のシェル型屋根を架けている。ＪＲの上下線のプラットホームと駅舎、ＪＲ駅から白島新駅への連絡路も工事が進んでいる。

ＪＲ山陽線とアストラムラインが接続されると市中心部へのアクセスが強化され、公共交通ネットワークが形成される。

工事の進捗（８月末現在）
（市のＨＰより転載）

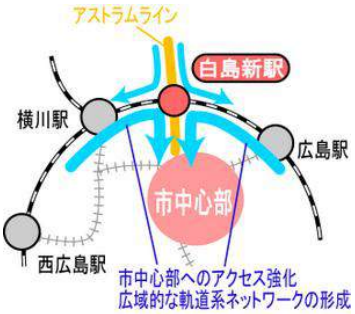
ただ現在の計画では、宮島方面（上り線）からの乗り換え客はＪＲの北側の駅を一旦出て、線路下の連絡路を通って南側にある

新駅まで歩かなければならない。開業すると乗客から苦情が出そうだが、敷地の制約のためやむを得ないという。

＊コメント＊

更に公共交通ネットワークの向上を図るためには、広電の白島線をアストラムの白島新駅経由で横川まで延伸してはどうか。そして横川～紙屋町～八丁堀～白島を環状線にすれば、市内の回遊性が高まる。地下鉄のない広島は路面交通の便の良さをブランドにし、人にやさしいバリアフリーなまちを目指すのが良いと思う。

（編集委員　瀧口信二）



白島新駅の効果イメージ
（市のＨＰより転載）

○広島の復興の軌跡（第８回）・・・被爆建物「旧陸軍被服支廠」について

ＪＲ横川駅前から大学病院行きのバスに乗って２０数分、出汐町のバス停下車。陸橋を渡り、皆実高校・県立工業高校正門前を通り過ぎて直ぐ左折し、車一台が通れる小路に入ると左手前方に巨大なレンガ造の建物が見えてきます。この小路を建物に沿って歩き突き当りを左折する間、ゆっくり歩いて１０分、Ｌ字形で４棟ある建物が被爆遺構群「旧広島陸軍被服支廠」です。

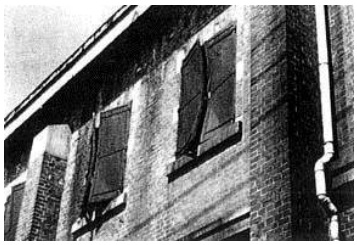
１．戦前の姿

広島陸軍被服支廠は１９０５年（明治３８年）に東京、大阪に次ぐ三番目の、主に軍服・軍帽、軍靴の製造工場及びそれらを保管・供給する施設として陸軍施設が点在する旧広島市の東南部の一角につくられました。現存する４棟は１９１３年（大正２年）に竣工したもので外観はレンガ積みですが、内部は鉄筋コンクリートのラーメン構造になっています。被服支廠は日本におけるＲＣ造の建築物として、その過渡期に建てられたものとして、建築史の上でも「貴重な資料」と言われています。

広島陸軍被服支廠絵葉書

２．被爆時の状況

１９４５年８月６日、被服支廠は爆心地から２．７キロの地点にあり、爆風により屋根が大きな被害を受けましたが、外壁が６０ｃｍと厚かったこともあり、火災や倒壊を免れました。そのため、被爆直後から避難してきた人の救護所として使われ、多くの被爆者がここで息を引き取りました。その当時の惨状は原爆詩人、**峠三吉の「倉庫の記録」**に余すところなく描かれています。



爆風により変形した鉄扉

『その日　いちめん蓮の葉が馬蹄型に焼けた蓮畑の中の、そこは陸軍被服廠倉庫の二階。高い格子窓だけのうす暗いコンクリートの床。その上に軍用毛布を一枚敷いて、逃げて来たものたちが向きむきに横たわっている。みんなかろうじてズロースやモンペの切れはしを腰にまとった裸体…、

八日め　がらんどうになった倉庫。歪んだ鉄格子の空に、きょうも外の空地に積みあげた死屍からの煙が上がる。……』（原文「倉庫の記録」より抜粋）

３．戦後の変遷

戦後、この巨大な軍施設「被服廠」は数奇な運命を辿ります。出汐町の大部分を占めていた敷地は広島大学、広島高等師範、財務局庁舎、公務員宿舎、県立学校、道路用地、その他民間の事業用地に次々と転用されて行き、建物は現存の四棟以外は全て解体されました。その後、一棟が広島大学の学生寮に、残り三棟を日本通運が倉庫として所有していましたが、１９９５年には日通も使用を止め、広島県に譲渡、１９９７年以降今日まで、全く使用されていません。

日本通運の倉庫時代

この間、建物群を管理する広島県は旧被服廠の被爆建物群の再利用ついて、有識者による会議を持ち「文化・歴史・平和・アジアの視点を基本に活用すべき」との結論を得ています。「博物館」「芸術文化拠点」「エルミタージュ美術館分館」などの構想がいくつも挙がりましたが結局、バブル崩壊以降の厳しい財政情勢下、具体化に至っていません。

旧制中学４年生の時、ここで被爆した中西巌さんは「旧被服支廠の保全を願う懇談会」をつくり、保存・活用を求めて活動を続けており「老いゆく被爆者同様、建物の劣化は進んでおり、残された時間は長くない」と訴えます。

４．現在の状況

撮影　筆者、８月末

広島市に登録されている被爆建物は８５件あります。来年の被爆７０年を前に広島市の松井一実市長は「被爆の実相を伝える建物を守ることは重要、歴史的意義、老朽化の度合いなどを踏まえ、保存のための支援策の見直し進めたい」と記者会見で被爆建物の保存に意欲を示しています。

私が現場を訪れた時、建物周辺の生い茂った夏草の刈り取り作業が業者によって行われていました。爆風で変形した鉄扉、半開きのもの、扉の落下を防ぐグリーンのネット、蔦が壁面全体を覆っている箇所…、その当時を想起させるとともに「今」があります。しかし、ぐるりと回ってもこの建物の説明板はどこにも見当りませんでした。ある看板は「ここは国有地です。許可なく使用しないで下さい」「犬にフンをさせるな！」のみです。これが被爆建物の中でも保存を求める声が高まっている「被服廠」の“実態”です。

（編集委員　三宅恭次）

□*ほっとコーナー*　『昔の事』

松島日出雄（アルテス広島事務所）

今は廿日市に住んでいるが、生まれ育ったのは西区の庚午北町である。父は鋼材販売の会社で働いており、旧 2 号線（当時は観光道路と呼んでいた）に面して会社の鋼材倉庫があり、その一部が住居であった。鋼材は馬車で運んでいたが、そのうち 3 輪トラックに代わっていった。

観光道路はまだ行きかう車も少なかった。進駐軍の部隊が休憩で家の前に止まり、兵隊たちの陽気さに、物珍しさから近寄っていくと、キャンディをくれたのを覚えている。三つ四つの頃だと思う。観光道路は己斐の手前に別れの茶屋で東に折れ、観音につながっていた。現在の新己斐橋たもとから広電の己斐駅にかけては、狭い道路の両側にバラックの商店街が連なり、買い物客で活気に満ちていた。当時在った映画館はいつも満員であった。

庚午は、そのころ、蓮田やイモ畑が広がり、庚午中学校は芋中と呼ばれていた。その畑の中を走り回り、一緒に遊んでいた従兄が肥溜めに落ち、いくら洗っても匂いが取れなかった。夏は近くを流れる太田川に飛込みの櫓が組まれ、町内で見張番をしていたように思う。堤防はまだ道路でなく自然のままであった。まだ広島に７つの川があったころである。太田川といえば、観音グランドで行われていた国体を見に行くのに、渡し船に乗って渡っていった。調べてみると３歳のころであった。観音グランドの座席に、藁で編んだ俵の蓋のような丸いクッションが無数に置いてあったのを、なぜか覚えている。

市の中心部の記憶では、円形のガラス張りで、コンクリートシェルの児童図書館は、子供心にも印象深い建物であった。

写真は、父の職場近くの本川岸で、父が撮影したものであるが、向こう岸は原爆ドームだけがある。

４歳の頃

○人物登場：井上英之氏（オフィス慧　専務）

略歴：1958 年広島生まれ、1981 年京大卒博報堂入社、1992 年（財）東京フロンティア協会出向、1997 年博報堂退社、2014 年オフィス慧設立

昨年８月に３７年ぶりに広島に戻り、今年先輩と二人で会社を設立。これまで蓄積したノウハウを故郷に還元したいという思いを心に秘め、今温めているアイデアを熱く語ってもらった。

☆これまでの足跡

広島に生まれ高校まで育ち、大学から離れる。社会人として大半を東京で過ごし、主にマーケティングの仕事に従事する。
鈴木東京都知事時代に臨海副都心開発の計画が持ち上がり、博報堂の有志で勝手に新しいまちづくりを企画・検討し、押しかけプレゼンの結果、江戸東京の４００年の歴史を学ぶためのカルチャー教室「江戸東京自由大学」企画が認められ、都が予算をつけてくれた。

その後、都が博覧会を企画・運営するため設立した（財）東京フロフロンティア協会に出向、５年半携わることになる。

博報堂退社後、広告からマーケティング全般にフィールドを広げて仕事をしてきた。東京にはスキルも人材も豊富だが、コンテンツはローカルにあると気づき、２年前に広島に帰ることを決意した。

☆ 広島のまちと人の印象

広島に帰ってからの第一印象は、川と緑が美しく、町がきれいなことだ。町がコンパクトで、広島駅からバスセンターまでよく歩くが、欲しいと思うところに店がない。東京の街中は歩くのが基本だが、広島は車を利用する人が多いので、店づくりの商圏が東京と異なる。
よく広島駅地区、八丁堀、紙屋町が個別の商圏として扱われているが、どう見ても一つである。各エリアからの回遊性を高めるためにも、歩いて不自由のない街にした方が良い。

広島の知名度は世界的に高いが、２０数万人の犠牲の上に成り立ったものである。亡くなられた人のことを考えながら、その知名度を活かして正しく商売をし、まちを元気にさせることは我々の責務である。原爆を食いものにしているという批判は当たらないと思う。

広島のお土産には知的な付加価値の付いたものが少ない。原爆ドームを見ても、考える場所や語り合える場所がない。メモリアルなもの、メッセージを託せるものを用意すべきである。広島人の気質として、商売は悪のような意識があるのではないか。

広島の人は誰かが右を向くと、自分は左を向きたがる。それぞれが努力しているけれど、ベクトルを合わせて協力するのが苦手なようだ。

☆ 広島のまちへの提言

「広島セントラルエコパーク構想」と呼ぶ。パークアンドライドを徹底して、街中は公共交通と徒歩と自転車で移動する。都心回帰で高齢者が都心マンションに移り住んでいるが、マンションを核として楽しく出歩けるまちは、適当な間隔で休憩所やカフェ・レストランや公衆トイレ等が配置されている。

昨年の広島への外国人観光客は５３万人。やがて１００万人の時代がやってくるので、様々な角度から検証し、対策を打たなければいけない。特に、円滑で快適な観光動線を誘導するサインとピクト化（絵文字）、世界遺産ビジターセンターの整備、交流学習の場となるゲストハウスの整備が急がれる。

☆これからやりたいこと

１７０本の被爆樹を一元管理するＮＰＯとゲストハウスを来春立ち上げる予定。不動産会社の協力によりビルをリノベーションしてゲストハウスを作り、その収益をＮＰＯに還元して運営していく。被爆樹を切り口として交流機能をもつゲストハウスは、広島ならではの情報を発信できる。それから、広島のブランドを作って外国に売り込むことと被爆以前の広島の歴史・伝統のベクトルを大事にしていきたい。

＊コメント＊　アイデアが溢れんばかりに出てきた。企画マンたる所以であろう。一つずつ実を結ばせて、広島におけるトップランナーとなり、後続を育てて欲しい。

聞き手：編集委員　前岡智之、瀧口信二（文責）

○アイデアコンペの中から提案！

２０１１年に行った広島市中央公園アイデアコンペの提案作品の中からこのエリアを考えるうえで貴重な提案、アイデア等を紹介していく。

・作品番号１　丹下健三氏の広島平和都市建設構想案

丹下氏の広島平和都市建設構想案

１９４９年に中島地区の「広島平和記念公園」の設計競技に当選し、ほぼその通り実現することになった。さらに１９５０年、丹下氏は基町地区まで拡張した「広島平和公園計画」を策定している。
１９４９年に制定された「広島平和記念都市建設法」の精神を具現化しようとしたものと言える。

南北の公園をつなぐ機能として児童センター本部を設置し、周辺に児童図書館や児童科学美術館等を緑の中に分散配置している。

その北側にはフットボール場や陸上競技場等の運動施設を配置。広島城域内には美術館、博物館等の文化施設を配置している。

平和記念公園から原爆ドームを貫く１本の軸線を北まで延長し、主要施設を秩序付けている。

基町地区案は児童図書館のみ実現したが、「広島平和記念都市建設計画」に盛り込まれることはなかった。

コメント

丹下氏は南北の公園を一体化したコミュニティセンターとしてとらえ、広島の都市のコアにしたいと考えていた。公共性の高い、誰でも利用できる施設群を緑のオープンスペースの中に配置し、過去の慰霊と未来の平和の創造を夢見ていたのではないか。

（編集委員　瀧口信二）

○お知らせ：「時代を語り建築を語る会(第６回)」開催
（語り人　高橋衛先生）

荒木市長時代に広島市博物館構想検討委員会委員長を務められた高橋衛先生（広大名誉教授）に『広島に博物館は必要ないのか・・・今一度博物館構想を検証する！』と題して語っていただく。

参加者からの質問にも答えていただき、自由な意見交換を予定しているので、ふるってご参加ください。

・開催日時：２０１４年９月２６日（金）１７：３０～１９：３０
・会場：広島市まちづくり市民交流プラザ、研修室Ｃ（北棟５階）
・会費：１０００円（資料費・会場費）、学生・院生は無料
・参加者定員：当日先着５０名
・参加希望者は下記の連絡先に電話・FAX・メールで申込む。
・連絡先：広島諸事・地域再生研究所
　　電話/FAX：０８２－２２３－７２２６
　　メールアドレス：nisimar5@hotmail.com
・主催：時代を語り建築を語る会実行委員会（代表　石丸紀興）

○こまちなみシリーズ③

金沢市は「こまちなみ保存条例」を制定し、「まちの歴史を色濃く残した、ちょっとした良い町並み」を「こまちなみ」として守り、育て、その雰囲気を生かした風格あるまちづくりを進めている。そこで、これに倣って、広島における残しておきたい「こまちなみ」を探訪し、シリーズで紹介する。

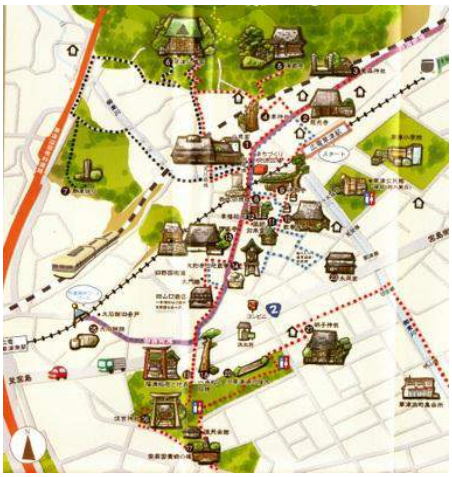
草津まち歴史の散歩道（広電･草津駅の周辺）

◆　歴史と「草津まちづくりの会」の活動

地域住民の崇敬する草津八幡宮は今年、創祀１４２０年を迎え、５月に厳粛なうちにも盛大なお祭りが行われました。このような古い歴史のある町に残る歴史的文化遺産を生かしたまちづくりをしようと、平成 10 年に結成したのが「草津まちづくりの会」です。

この地域は原爆の影響は爆心地から４,７ｋｍ離れていた為、爆風による大きな影響はあったものの火災などの発生は無く、多くの神社仏閣や古い町並みがそのまま残りました。江戸幕府の五街道に次ぐ重要な街道の一つの西国街道、近世の山陽道が町の中を通っており、西国大名の参勤交代や幕府代官などが往来していました。

「草津まち歴史の散歩道」は、この西国街道を中心とした地域を対象としています。この様な私たちの歴史と文化資産を生かした活動が認められ、平成１６年には「第９回広島まちづくりデザイン賞」を広島市長より受賞し、平成１８年には国土交通大臣より「まちづくり功労賞」を受賞しました。



広電・草津駅周辺は“草津まちの宝”
赤の道が西国街道（旧山陽道）

◆　「来て見て食べて草津うまいもん市場」（3 月の第 2 日曜日）

全国的に有名な広島カキ発祥の地であるカキのみならず、町の三大産業である魚類及び練り製品（蒲鉾が中心）各業者の協力を得て、盛大なイベントとなっています。特に魚市場の荷受会社２社の協力で行っている「大マグロの解体ショー」は圧巻です。是非一度見てください。

天保年間創業の小泉酒造、今も宮島の御神酒を製造

◆　「草津まちオープンミュージアム」（9 月の第 1 土・日の 2 日）

我々の会発足以来、毎年開催している年中行事の中のメインイベントです。町全体をミュージアムに仕立て、造り酒屋で聞く“酒蔵コンサート”。お寺で聞く“和のコンサート”。広電草津駅のホームで見る“ステーションギャラリー”。練り物の実演販売など盛り沢山の行事が来訪者を満足させています。
（今年は９月６日・７日に終了しました）

創祀 1,420 年を迎えた草津八幡宮、けんか神輿が有名

◆　「除夜の鐘ラリー」（年末 12 月 31 日の深夜から）

町にある四つの寺の梵鐘を撞いて、一年を振り返り新しい年を迎える行事です。四つの寺のスタンプが揃うと心ばかりの記念品を進呈しています。最近では除夜の鐘を撞いて、その足で氏神様である草津八幡宮に初詣するコースが出来、大晦日の夜の町の賑わいを創出し新しい風物詩となっています。

ご要望があればガイドクラブのメンバーが「まちガイド」を務めています。昨年のガイド実績は３０回で６９０名の方々のガイドを務めました。このような活動は我々だけでは不可能です。町内会をはじめ地域の各種団体・企業などが、サポーターとして大きな力となっていることを申し添えます。

草津まちづくりの会　世話人代表　宮川秋三
問い合わせ先　　西区・草津公民館　　ＴＥＬ　（０８２）２７１－２５７６

○読者からの投稿

投稿者　田中　聡（広島市民）

『まちづくりひろしま第 12 号』の『哲学は遺言書』通谷氏著は、高い哲学思想からの街づくりを説いておられ感銘しましたが、文末尾の『もっと厚い知恵が込められた大胆（精神的に）な表現』の具体例が記されていません。次号で構いませんが『例えば』として具体例を教えてください。

（回答）

前号、第十二号で書かせていただいた巻頭言「哲学は遺言書」という一文に対して、ご質問を頂戴した。質問の主は、田中聡さんという人物。田中さんと私とは面識はない。どんな仕事の方かも無論知らない。しかし、私に質問をぶつけるあたり、相当な見識の方と思える。

質問の内容は、文の後半部分「厚い知恵が込められた大胆な表現＝街づくり」をもう少し具体的に表現してよ、という依頼である。

元々、この一文に関しては、内々の編集会議でも多少のご指摘を受けた。まず、タイトルの「哲学は遺言書」がピンとこない、別の表現をせよ、というものである。まあ、「街づくりにも哲学を活かせ」とか、「欠かせぬ哲学的な街づくり」とかのタイトルなら、懐疑を生まなかったのであろうが、私はやんわりと押し通した。そういう、ちょっと曰くつきの文面ではある。

ご存知の方も多いと思うが、哲学はどれほど読んでも簡単には分からない。だが、「ええーい、ままよ」と匙を投げだして読めば、実に簡単でもある。多分、①考えを突き詰めるのが哲学②苦しいとき、心を救うのが哲学③宇宙（地球でもよい）と自分との関係を考える、または、自分と宇宙との関係を考えるのが哲学。この三点に要約されるからであろう。

哲学を齧った人には、釈迦に説法だが、ギリシャのタレスという人物が、何の加減か「万物の原理は水である」と言い出した。二千六百年前に遡る。当時としては一種独特、ある意味滑稽と思える考えだったが、タレスは周囲から笑われながらも思索を止めなかった。これが哲学の始まりと言われているが―、すると、「いやいや、そんなことはない。万物は無限である」とか「空気で出来ている」などと反論する者があらわれ、彼らも皆「哲学者らしい」位置づけがされていく。まあ、万人の頭の中には宇宙が住んでいて、思索はどこまでも広がっていくのだが、なんといっても、その後のソクラテス、アリストテレス、プラトンたちの出現で次第に認知。当初の怪しい妄念が学問らしき様相を帯びていくわけである。

前記、三哲人の中でも、私はプラトンに興味を抱いている。彼は「哲学は死に至る準備」と言っており、私が好きな言葉の一つ。そこで、プラトンを想起しやんわりとタイトルに拘泥。「哲学」を「人生」に置き換え、次いで「哲学は遺言書」に置き換えてみたのである。

さて、ご質問だが、そうして考えると、厚い知恵、大胆な表現とは、やはり思索であろう。思索の発露が街に溢れているかどうかである。多くの人が共鳴する創作には「あんた、こんな物をよう考えなさったね」と感心されるだろうし、足りずであれば「どうしてこんな物を作ってしまったの」とガッカリされるだろう。

創作物（建物・街）は、壊れるまで、または壊されるまで目につく。一般人は有無を言わさずその日まで毎日見らされている。ならば、建築・建設にかかわる人々の連綿と思索し続けた叡智の結晶であるべきであり、どうせなら利害が絡んだ現実にあまり捉われない作品を望むのは不遜であろうか。

さて、思索を重ねた創作物か否かの判断だが、これは「自己分析」に比重が移る。「私の作品はいかがでしょうか」と他人に聞かなくても思索を重ねた人なら、ちゃんと答えは分かっているはずだ。絶対的な評価はご自身が持っていなければ「感心される」創作物は作れない。

因みに夢判断で有名なフロイトの思索も、哲学の領域に含まれる。見た夢がどうたらこうたらと考えるのも、自己を分析できるから可能―の上に立っている。

最後にもっと砕けさせてみる。別の答えの一つは子どもの視点（利害・現実に強く左右されない）である。思いつくまま列記してみる。
①「うわーすごい、この建物（街）を見て驚いたよ」②「見ていて飽きないデザインね」③「未来の人も喜んでくれるよ」④「こんな建物（街）、私の国にも欲しいな」⑤「大切な友達に教えてあげたいな」⑥「何度来ても幸せな気分になれるの」⑦「作った人と話がしてみたい」⑧「ここに住みたい」…などである。まあ、だれもが単純に歓喜の声をあげ、深間に触れていくと強い感動を覚えるのが街づくりの神髄ではなかろうか。

大人は子供のなれの果てである。だが、上記の感覚を遠い昔に忘れてしまった、では悲しい。驚嘆すべきテクニック、工法、材質選択…、建築基準の超越や感性、経験、歴史観、世界観、宇宙観などを選択しながら街づくりに盛り込むべきではないだろうか。もし、あなたが街づくりを担っているなら、現実優先を二の次にしても私は怒らない。
さあーて、今回も生意気を書いてしまいました。そしてかなり苦しい説明ともなりました。田中聡さん、限られた紙幅での返答、隔靴掻痒の部分はお許しください。ヨロシク。

※この文面、もし可能なら前十二号を参照していただければ、ご理解が少しは進むと思います。
（通谷　章）

□編集後記

私は安佐北区可部町の住民なので、この度の土砂災害では多くの知人から安否確認をいただいた。幸いにも被害エリアから外れていたので無事だったが、山裾の造成団地に住む身としては他人事ではなかった。全国どこでも起こりうる災害であり、同じ思いをされた方が多いのではないか。「強靭な国土づくり」とか、「安心・安全な国づくり」とか、行政の掛け声に相乗りするだけでなく、自分の問題として防災意識を高めるため、私たち一人一人が真剣に考えていく必要がありそうだ。
被災者救援のため集まってこられたボランティアの皆さんには本当に頭が下がる。その中に若い人たちの姿を多く見ると嬉しさがこみ上げてくる。日本の将来も捨てたものではない。ボランティアに参加できない方も多数おられるはず、私もその一人だ。自分のできる範囲内のことをささやかながらできればよいのではないか。被災者の方々の痛みや苦しみに思いを馳せるだけでもよい。きっとあなたのできること、あなたにしかできないことが見つかるのではないかと思う。

（編集委員　瀧口信二）

＊メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！

（投稿は５００字程度以内でお願いします）

編集委員

石丸紀興　広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視　心豊かな家庭環境をつくる広島２１理事
瀧口信二　広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷　章　ガリバープロダクツ代表
前岡智之　中国セントラルコンサルタント代表
三宅恭次　元中国放送役員